

猫に対する催吐処置の回顧的研究

○加地英樹¹⁾、森田 肇¹⁾、一萬田正直²⁾、北島 肇¹⁾、今井彩加¹⁾、高橋里沙子¹⁾、
齊藤小夜子¹⁾、山田修作¹⁾、村上彰一¹⁾、星野由実¹⁾、小林 巧¹⁾、白石陽造¹⁾

- 1) 公益財団法人 日本小動物医療センター附属動物夜間救急診療センター
- 2) 公益財団法人 日本小動物医療センター附属日本小動物がんセンター

【はじめに】異物誤食に対して催吐処置が実施されることは多いが、猫の催吐処置に関する報告は少ない。今回、我々の施設における猫の催吐処置の調査を行ったため、その概要を報告する。

【材料と方法】後ろ向き観察研究。2018年から2021年の間に日本小動物医療センター附属動物夜間救急診療センターに異物の誤食を主訴に来院し、催吐処置が実施された猫の医療記録を調査した。年齢、体重、誤食した異物の種類、メドトミジンとトラネキサム酸のそれぞれの投与量、投与回数、催吐処置の成功の有無、有害事象の有無を医療記録から回収した。誤食した異物の種類は線状異物とそれ以外の異物に分け評価した。連続変数の比較はデータの正規性に応じてt検定もしくはMann-Whitney U 検定を用い、カテゴリ変数の比較はFisher's 正確検定を用いた。単変量解析でp値が0.05未満の変数はロジスティック回帰を用いて多変量解析を行った。

【結果】過去3年間に当センターで催吐処置を実施した猫は76症例で、年齢の中央値は2歳（四分位範囲：0.98-4歳）、体重の中央値は4.28 kg（四分位範囲：3.69-5.47 kg）であった。誤食した異物は線状異物が35例、その他の異物が41例であった。メドトミジンの総投与量の中央値は20 μ g/kg（範囲：8-50 μ g/kg）、トラネキサム酸の総投与量の中央値は100 mg/kg（範囲：40-180 mg/kg）であり、総投与回数の中央値は2回（範囲：1-3回）であった。1回目の薬剤投与後に嘔吐した症例は22例（29%）、最終薬剤投与後に嘔吐した症例は48例（63%）であった。単変量解析では、催吐処置で嘔吐しなかった症例は嘔吐した症例と比較して有意に若かった（ $p=0.04$ ）。メドトミジン使用群（44例）はトラネキサム酸単独使用群（32例）と比較して催吐成功率が有意に低かった（ $p<0.01$ ）。多変量解析ではメドトミジン使用群で有意に催吐成功率が低かった（オッズ比：0.19, 95%信頼区間: 0.06-0.62, $p<0.01$ ）。有害事象はメドトミジン使用群のうち16例（36%）に鎮静やふらつき、トラネキサム酸使用症例のうち2例（3%）に過剰な流涎、1例（2%）に痙攣発作が認められた。

【考察】今回の調査ではメドトミジン使用群ではトラネキサム酸単独使用群と比較して催吐成功率が有意に低かった。過去の報告では、メドトミジンを使用した催吐処置の成功率は58-80%と報告されており、今回の我々の報告と差が認められた。その理由として、メドトミジンの投与経路や投与量の違いや、担当医による選択バイアスなどが影響していると考えられた。今回の研究結果を元に、今後猫の催吐処置に関して統一されたプロトコルによる前向き観察が必要である。